

40. 乳癌の診断において FDG-PET が有用であった 1 症例

岡村 光英 河辺 譲治 下西 祥裕
小橋 肇子 細川 知紗 越智 宏暢
城村 尚登 藤本 幹夫

(大阪市大・核, 放, 三内, 藤井寺市民病院・外)

乳癌の早期検出に ^{18}F -fluorodeoxyglucose (FDG) による PET 検査が有用であった 1 症例を経験したので報告する。

症例は 50 歳女性。主訴は右乳房精査。現病歴は平成 5 年 6 月、右腋窩の約 2 cm 大の腫瘤に気づき近医受診。腫瘤は摘出され病理組織検査の結果腺癌と判明、乳癌由来のリンパ節転移が疑われた。原発巣検索するも右乳房に疼痛や乳汁分泌なく、腫瘤も触知されず。mammography (MG), X 線 CT にても腫瘤は指摘されず。石灰化像(一)。原発巣が同定されないため、同年 11 月に PET 検査を行った。FDG-PET 検査: ^{18}F -FDG 300 MBq を静注、40~55 分後に乳房を中心に胸部を撮像。右乳房部に FDG の集積を認め、対側部に比し 1.5 倍の集積がみられた。PET 検査の結果から右乳癌が強く疑われたが、腫瘤として触知されず経過観察となった。平成 6 年 1 月と 6 月の MG では異常なく、腫瘤も触知されず。PET 施行 1 年後、右乳房腫瘤を自覚。触診で右乳房外側下部に腫瘤を触知。同時期の超音波検査では $3.6 \times 1.5 \text{ cm}$ の境界不明瞭な楕円形、八つ頭状の hypoechoic mass を認めた。平成 7 年 1 月、定型的乳房根治術が施行された。手術時肉眼所見は割面灰白色、充実性で周囲脂肪内への浸潤を認めた。腫瘍サイズは $2.2 \times 2.0 \times 1.5 \text{ cm}$ 大。病理組織診断は乳頭腺管癌。右腋窩リンパ節 21 個切除のうち 7 個に転移あり。T2aN1bM0, stage II。

以上、触診、MG, X 線 CT にて異常を指摘し得なかった時期に、FDG-PET にて検出しえた乳癌の 1 症例を報告した。潜在癌の検出に FDG-PET は有用と考えられた。

41. FDG-PET にて異常集積を認めたサルコイドーシスの 1 症例

小橋 肇子 河辺 譲治 岸本 健治
山田 龍作 (大阪市大・放)
岡村 光英 越智 宏暢 (同・核)
城村 尚登 (同・三内)

FDG-PET の悪性腫瘍に対する有用性は、以前より報告されている。しかし、最近悪性腫瘍以外の病変への集積例も報告されている。今回、サルコイドーシスへ FDG の集積を認めた症例を経験した。症例は、61 歳女性。主訴はふらつき感。現病歴は平成 5 年 9 月よりふらつき感出現し、当院入院、完全房室ブロックの診断にてペースメーカーを埋め込んだ。入院時、鎖骨上窩のリンパ節を触知、生検にてサルコイドーシスと診断。胸部単純写真; 両側肺門が腫大。胸部 CT; 縦隔・両側肺門にリンパ節の腫大を認めた。ガリウムシンチ; 右鎖骨上窩・縦隔・両側肺門・右下腿内側部に RI の異常集積を認めた。FDG 静注 40~55 分後 static scan および linear scan を施行。胸部横断像にて上縦隔・両側肺門・気管分岐部・心尖部に FDG の高集積を認めた。linear scan 像で縦隔・肺門・心尖部に加え、右鎖骨上窩・右下腿内側部に FDG の高集積を認めた。胸部横断像で上縦隔・気管分岐部・心尖部に設定した関心領域 (ROI) の SUV (PET で測定した組織放射能 (Bq/g)/ 注射量 (Bq)/ 体重 (g)) は、各々 6.9, 7, 6 であった。FDG 静注直後から 55 分後までの各部位の SUV の経時変化を表す time activity curve は、3 部位とも上昇し続けた。サルコイドーシスの病変部に、FDG が強く集積した 1 例を報告した。本疾患の FDG の集積パターンおよび SUV 値からは、従来報告されている悪性リンパ腫との鑑別が必要と考えられた。